

くりかえし符號の使ひ方 をどり字法(案)

文部省 1946・3

81

Mo

100176



昭和二十一年三月

くりかへし符號の使ひ方〔をどり字法〕(案)

文
部
省

127559

本省で編修または作成する各種の教科書・文書などの國語の表記法を統一し、その基準を示すために、

- 一、送りがなのつけ方（案）
- 二、くぎり符號の使ひ方〔句讀法〕（案）
- 三、くりかへし符號の使ひ方〔をどり字法〕（案）
- 四、外國の地名・人名の書き方（案）

の四篇を印刷に附した。この案はその一つである。

諸官廳をはじめ一般社會の用字上の參考ともなれば幸である。

（文部省教科書局調査課國語調査室）

林 文庫

くりかへし符號の使ひ方〔をりど字法〕（案）

まへがき

一、この稿は、くりかへし符號を用ひる場合の基準を定めたものである。

二、くりかへし符號は同字反復の符號である。これまで、疊字・重文・送り字・重ね字・をどり字・ゆすり字・ゆすりかな等と呼ばれて來たものであるが、この稿ではさらにあらたに一つの符號を取り上げるとともに、これらの性質を分りやすく言ひあらはし、かつ一般に通じやすいと思はれる呼び名として、かりに「くりかへし符號」といふ名を用ひた。

三、くりかへし符號は左の五種である。

一ツ點、かなにつけて用ひるもの

くノ字點、かなまたはかな交りの語句につけて用ひるもの

同ノ字點、

二ノ字點 ˙ (と)

漢字につけて用ひるもの

ノノ點 "

數字や語句を代表するもの

右、各種の符號の呼び名は、一部は在來のもので、一部は取扱ひ上の便を考へてあらたに定められたものである。

四、くりかへし符號の用法の中で、これまで最も統一を缺いてゐたのは、例へば「ぢぢ」「ばらばら」のごとく語頭に濁音をもつことばの書き方であつた。すなはち、「ぢぢ」「ばらばら」を書く場合に次のごとき三様の書き方が行はれてゐたのであるが、この案では、その中の(一)の書き方に従つた。

(一) ぢゝ ばらく

(二) ぢゞ ばらく

(三) ぢゞ ばらく

五、くりかへし符號は、同一の語の中で用ひることを原則とし、次のごとき場合にはかなを重ねて書く。

(一) 話したために 読んだだけで

それとともに さうしたもののみ

そのうち いままで

行つただらう すべてです

(二) 香川縣 かがはけん 馬場氏 ばばし 平の知盛 たひら とももり

(三) パパ ママ チチハル

〔附記〕 右の原則によつて、例へば「立てて」を「立て、」と書くのはよくないといふ人もあるが、しかし、この「立てて」などは、一方から見れば「立つ」と「て」との二つの單位から成つてゐるものであるが、一方から見れば「立てて」でもつて一つの單位を成すものであるから、やはり同一語中の用例であるといふことが出来る。ゆゑに、「立て、」の類の書き方も認められる。

つぎに、日常の文書において使用率の高い「こと、」「もの、」「○○町々會」などの書き方も、これを許容的に認めておくことが現代一般の慣用に照らしておだやかであらう。

六、くりかへし符號はテン（讀點）をへだて、は用ひない。例へば——
「こ、こ、こ。」と、おやどりがよぶ。

「ちゅ、ちゅ。」と鳴く小鳥の聲、

ド、ド、ド、ド、ドといふ波の音、

さら〜、さら〜と葉ずれの音がして、

「あっ、兎、兎。」

一歩、一歩、力強く大地をふみしめてゆく。

〔附記〕 くりかへし符號の適用は、右のごとく一種の修辭的用字法、すなはち文のリズムを表現するものである。

呼び名	① 一つ點
符號	ゝ
準則	<p>一、一つ點は、その上のかな一字の全字形（濁點をふくむ）を代表する。ゆるに、熟語になつてにざる場合には濁點をうつが（例2）、濁音のかなを代表する場合にはうたない（例3）。</p> <p>二、「こゝろ」「つゝみ」などを熟語にしてにざる場合には、その「ゝ」をかなに書き改める（例4）。</p> <p>〔備考〕「ゝ」は「ゝ」をさらに簡略にしたものである。</p>
用例	<p>(1) ちゝ はゝ</p> <p>(2) たゞ ほど</p> <p>(3) ぢゝ ばゝ</p> <p>(4) づつ 小包<small>こつぷみ</small></p> <p>眞心<small>まごころ</small></p> <p>案内がかり</p> <p>氣がかり</p> <p>くまざさ</p>

(3) 同 <small>どう</small> の字 <small>じ</small> 點 <small>てん</small>	(2) く <small>く</small> の字 <small>じ</small> 點 <small>てん</small>
々	く
<p>一、「々」は漢字一字を代表する（例1 2 3 4 5）。</p> <p>〔備考〕「々」は「全」の字から轉化したも</p>	<p>一、「く」は、二字以上のかな、またはかな交り語句を代表する（例1 2 3 4 5）。</p> <p>〔備考〕「く」は「くく」「くくく」を経て「くく」となったものである。</p>
<p>(3) 正々 堂々</p> <p>(2) 我々 近々 近々</p> <p>(1) 世々 個々 日々</p>	<p>(1) いよく ますく</p> <p>(2) しみく それく</p> <p>(3) しげく しばく</p> <p>(4) ばらく ごろく</p> <p>(5) 一つく 思ひく</p> <p>散りく 代るく</p> <p>知らずく くり返しく</p> <p>ひらりく エッサッサく</p>

のと考へられてゐる。

(4) 二の字點

と 々

一、「と」は、手寫では「々」と同價に用ひられるが(例1)、活字印刷では「々」の方が用ひられる(例2)。
二、活字印刷で用ひる「、」は「と」の別體であるが、その働きは、上の一字を重ねて訓よみにすべきことを示すものである(例34)。

年々 歳々

(4) 一步々々

賛成々々

(5) 双葉山々々々

(1) 草々

(2) 草々

(3) 稍々(や々) 略々(ぼ々)

(4) 愈々(いよ々) 各々(お

の々) 旁々(かた々)

交々(こも々) 屢々(し

ば々) 抑々(そも々)

三、「唯」は「唯」と書かない(例5)。

四、「各の」「諸の」は「各」「諸」がなくても読みうるが(例67)、普通には「各」「諸」をつける(例8)。

五、「々」は「々々」で代用される(例910)。殊に「多々益々」ではかならず「々々」を書く。

〔備考〕「々」は「々々」の草書體から轉化したものと考へられてゐる。それを小さくして右に片寄せたのが即ち

偶(たま) 熟(つ)

ら(く) 熟(つく)

益(ます)

(5) 唯(たゞ)

(6) 各(おの)の意見

(7) 諸(もろ)の國

(8) 各(おの)意見を持ち寄つて

(9) 各々(おの)々々

益々(ます)々々

(10) 多々益々

(5)

ノ
ノ
點

〃

「、」である。

〔附記〕 例3 4 5 6 7 8 9 の類の語は、なる

べくかなで書く方がよい。

一、「〃」は簿記にも文章にも用ひる(例
12)。

〔備考〕 「〃」は外國で用ひられる「カ」か
ら轉化したものであり、その意味はイタ
リア語の Ditto 即ち「同上」といふこと
である。なほ國によつて 「〃」の形を用
ひる。

(1)

月	日	圓	備考
1	25	10 00	
〃	〃	25 00	
〃	〃	12 35	
〃	26	10 00	
2	1	1 00	
〃	〃	10 00	

(2)

甲案を可とするもの一二八

乙案 〃 三一九

丙案 〃 二六五

7559

国立国語研究所



1001766938



1

24

6938